実践報告

グローバル化を生き抜く力を育てる授業
～日本とブータン、社会科と英語科のコラボレーションを通して～

小暮直也
（生徒指導力高度化コース第５期生）

1. はじめに

日本には、多くの外国人が観光、ビジネスなどを目的として滞在している。三重県にも多くの外国人労働者がおり、外国にルーツを持つ生徒も多い。グローバル化やグローバル人材といった言葉を耳にする機会も増えてきたように感じる。

文部科学省（2019）新学習指導要領地理的分野目標（1）にはグローバル化について次のように記述されている。

> 社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して，広い視野に立ち，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

下線部は、社会科における地理的分野・歴史的分野・公民的分野の共通した目標になっている。ここではグローバル化する国際社会に対応できる生徒を育てることが求められている。筆者が海外旅行を趣味としていることもあり、社会科の授業では海外旅行でのエピソードを語ったり、写真を見せたりすることが多い。しかし、それだけでグローバル化する国際社会に対応できる生徒が育つとは言えない。「グローバル化する国際社会に主体的に生きる」生徒を育てていくことが、本実践のモチベーションである。

2. テーマ設定の理由

「グローバル化する国際社会に主体的に生きる」生徒を育てていくためには、どのような力を育んでいく必要があるのだろうか。文部科学省（2009）の中にヒントがある。

> グローバル化に伴い、地球規模での相互連結性が高まり、異なる文化・文明の接点が大規模に広がっていく。このことは異なる倫理観・価値観の間での摩擦を生み出す危険性が高まっていくことを意味している。このため、異なる文化・文明を理解、尊重し受け入れる寛容さが国際的な摩擦を緩和し、平和な国際社会を維持する上で重要となる。また、たとえ、文化・文明が異なる国や地域に属していても、共有できる倫理観や価値観があることに気づくことも同様に重要である。このような精神的寛容さを培い、共通の倫理観・価値観を確認するためには、実際に異文化・文明に属する人びとと接触する機会を増やすことが重要であり、国際教育交流を通じた取り組みが必要である

要約すると、グローバル化に伴い、異文化の間での摩擦がおきるため、異なる文化や文明を理解したり尊重したりする寛容さを身に着けることが重要であるということになる。そして、その手立てとして、「異文化・文明の人びとと接触する機会を増やすこと」が重要と考えられている。しかし本校がある地域は、県庁所在地から車で２時間３０分以上もかかる地域にあり、外国人を始めとした異文化と直接触れ合う機会が少ない。このような実情を踏まえ、実際に直接触れ合うことはできないものの、ICT 機器を使って、異文化と触れ合う機会を作る計画を立てた。ICT 機器を使用することで「異文化・文明に属する人びとと接触する機会」を増やし、「異なる文化・文明を理解、尊重し受け入れる寛容さ」を育んでいく実践を行うことにした。

この実践の計画を学年団の先生方と相談していたところ、本校英語科の教諭が外国人との交流に興味を示した。英語教育では、CLIL と呼ばれる学習が行われている。日本 CLIL 教育学会ホームページによると、CLIL とは教科科目やテーマの内容の学習と外国語の学習を組み合わせた学習の総称であるという。CLIL では、学習者のコミュニケーション能力の育成や、学習者の文化あるいは相互文化の意識を高めることができるとされており、本実践の成果をより高めることが期待できる。そのため、社会科で行う異文化交流のツールとして英語を使用することにし、社会科と英語科のコラボレーションにより本実践を行うことにした。

3. 授業の概要

（１）交流先

交流先はブータン王国とした。京都教育大学連合教職大学院の同期が青年海外協力隊員となりブータンに派遣されていたため授業案について相談したところ、実践の趣旨に賛同し協力を得ることができた。その青年海外協力隊員に依頼し、JICA ブータン事務所との連携や授業協力依頼書の申請を行ってもらった。生徒が交流する対象は JICA ブータン事務所の職員のブータン人及び、当該青年海外協力隊員となった。

（２）使用機材

ブータンと交流するツールには Skype を利用した。Skype とは、インターネット上で世界中の人々と無料で電話やテレビ電話などができるソフトウェアである。テレビ電話ができるため、相手の顔を見て会話をすることができるのが利点である。事前に青年海外協力隊員と Skype を繋いだときも音声、映像ともに鮮明に交流することができた。

（３）授業形態

基本的には、社会科と英語科の教師 2 名で授業を行った。第 1・2 時は T1 社会科で T2 英語科、第 3・4 時は T1 英語科 T2 社会科、第 5・6 時は T1 社会科 T2 英語科で行い、T1 が授業の進行を行い、T2 が板書や机間支援を行った。第 5 時には本校の ALT（Assistant Language Teacher）も参加した。

T1 を社会科で行う授業は、時間割上は社会としてカウントし、T1 を英語科で行う授業は英語としてカウントした。

（４）地理における実践

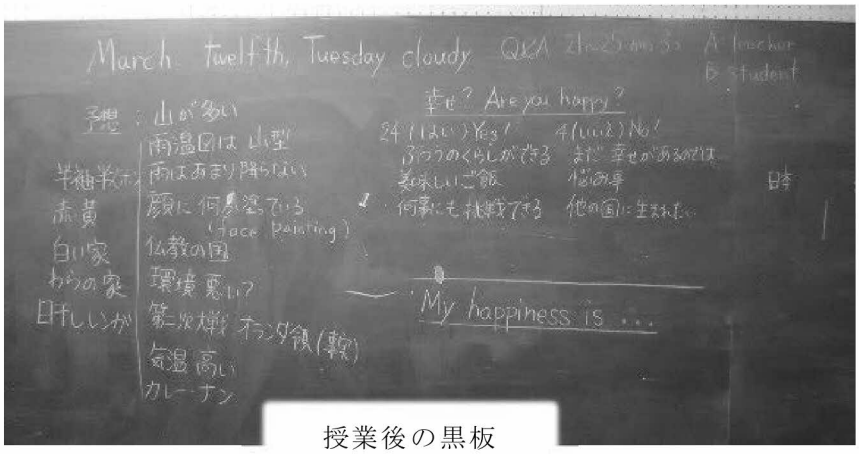
本実践は世界地理のまとめにあたる、「さまざまな地域の調査」の単元で行った。この単元では、社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせ、課題を追求したり解決したりする力をつけさせるために、世界の地域について疑問に感じたことを本やインターネットなどで調べる活動を行う。しかし、調べた情報の出所が不確かなことや、最新の情報でない場合も少なくない。また、知りたい情報を調べ切ることができず、自身の成果に対して達成感のないまま授業を終えてしまうこともある。そのため、ブータンを学習し地理的な見方・考え方を働かせて予想した疑問を、直接ブータン人にインタビューして追及する機会を設定することで、課題解決力がつき、達成感のある活動にできるのではないかと考えた。

（５）授業計画

・第１時‥ブータンについて予想する・学ぶ

事前にブータンについて知っているか授業を受ける１年生 80 名に事前に確認すると、ブータンの国名を知っている生徒は 50 名程度いたものの、ブータンについて“何か知っている”生徒は０名であった。生徒がブータンについて何も知らなかったので全員の知識に差のない状態で授業に入ることができた。

まず、外国と Skype を使って交流することを伝えた。そしてその対象国を①その外国と日本の時差は３時間②アジアの国③内陸国という３つのヒントから予想させた。



授業後の黒板

次に、世界地理の学習のまとめでもあるので、今までに鍛えた社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせる活動を取り入れ、ブータンの地理的な事象を予想させた。国旗・地形をパワーポイントで示し、地図帳を参考にしながら気候(気温・雨)、食べ物、服装、住居、宗教について予想させた。「赤道よりも北にあるので、雨温図は日本と似ている」「山が多いので家の材料は日干しレンガ」「インドに近いため、カレーやナンを食べている」など、世界地理で学習した内容をもとに見方・考え方を働かせて予想できている発言もあった。さらにブータンのキーワードである“幸せ”について考える時間をとった。

最後に、これらの学習をもとにしてブータンに関する疑問を考え、個人でワークシートに記入した。このとき、SDGS の 17 の目標を提示して、ブータンやブータン人に対する興味からでてくる質問だけでなく、社会科的な内容の質問が出てくるように支援した。

・第２時‥青年海外協力隊員の生き方について学ぶ

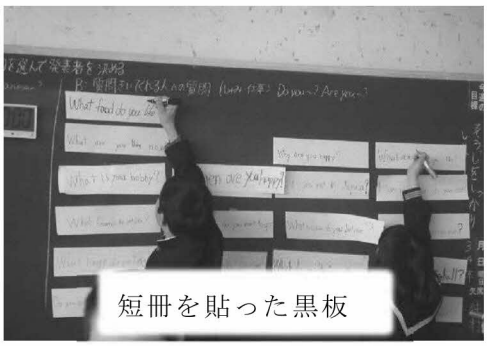
青年海外協力隊についてはアフリカ州の学習で学んでいるものの、直接話を聞く機会はな

かったので、生徒の今後の生き方のロールモデルの一つとしてほしいという願いも込めて、青年海外協力隊員の仕事について詳しく学ぶ時間をとった。青年海外協力隊員の仕事を動画で紹介し、青年海外協力隊員に質問したい内容を考えた。

・第３・４時‥質問内容を考え英語に訳す

第１時、第２時で個人で考えた質問を、班で交流しながら英語に訳した。まず、個人で考えた質問を班で交流し、班の中でブータンの人に質問したい内容と青年海外協力隊員に質問したい内容を選抜した。

次に、辞書を使用し、わからないところは班のメンバーと相談しながら、質問内容を英語に訳していった。そして、英語に訳した質問内容を短冊に書き込み、黒板に貼り付け、最後に、クラスの多数決によりブータンの人に質問したい内容と青年海外協力隊員に質問したい内容を各クラスで５つずつに決定した。また、この時間に Skype を使って生徒を代表して英語で質問する生徒を募集した。


短冊を貼った黒板

・放課後‥質問内容決定

質問者に立候補した生徒を放課後集めて、発表する質問の割り振りを行った。その際、文法・発音の再確認と回答に対する追加質問を行うかどうかの確認を行った。以下、放課後の活動で決定した質問（一部）である。

What animals do you like?
What is your hobby?
What do you think about Japan?
Do you have any unhappy occurrences?
Are you happy?

JICA ブータン事務所の職員に対する個人的な質問（外国人への興味）

What wild animals live in Bhutan?
What food do you usually eat?
What is a famous food in Bhutan?
Where is Bhutan's good place?
What religion do you believe in?
Why do Bhutanese worship dragon?

ブータンの地理的内容に関する質問（ブータンの事実を確認する）

Do you drink clean water?
Does Bhutan have economic stability?
Can your town's children study?
How long is compulsory education?

SDGS に関連した内容を含んだ質問

※青年海外協力隊員への質問は割愛

各クラスで出た質問をまとめていくと、外国人に対する興味による質問、自らが予想したブータンの様子について事実を確認する質問、SDGS に関する内容を含んだ質問の３つに分けることができた。

・第５時‥Skype リハーサル

実際に質問する生徒によるリハーサルを行った。学年の生徒の前での質問は、質問者が緊張することが予想され、相手の応答も即興的な要素が多い。そのため、なるべく本番に近い状態で事前に経験をさせたいと考えた。そのため、本校の ALT に協力を依頼し、リハーサルを行った。１年生の全クラスを当日使用する音楽室に集合させ、当日と全く同じ流れでリハーサルを行った。質問者は実際に Skype を接続するパソコンの前に立ち、ブータンの人や青年海外協力隊員が映し出されるスクリーンの前に ALT に立ってもらった。ALT には生徒の質問に対して自身の経験から回答してもらった。生徒は、ALT の国の様子を知ることができ、この活動自体も楽しんでいる様子だった。

・第６時‥JICA ブータン事務所の職員・青年海外協力隊員に Skype を通して質問する

実際に第６時で行った授業のタイムテーブルを紹介する。

時程 （ブータン時間）	学校の動き	ブータンの動き
１３：４０ （１０：４０）	学校側から Skype 接続開始 ゾンカ語で挨拶 生徒代表（４名）による学校紹介 【英語】	青年海外協力隊員と JICA ブータン事務所の職員が民族衣装を着た状態で待機
１３：４５ （１０：４５）	生徒代表（１５名）が質問 ①JICA ブータン事務所職員への質問 【英語】 ②青年海外協力隊員への質問 【英語・日本語】	①JICA ブータン事務所の職員が質問に答える ②青年海外協力隊員が質問に答える
１５：００ （１２：００）	生徒代表（１名）による終わりの挨拶 【英語】	青年海外協力隊員と JICA ブータン事務所の職員による中学生へのメッセージ
１５：１０ （１２：１０）	ゾンカ語で感謝を伝える 学校側から Skype 切断	

Skypeを通して、青年海外協力隊員とJICAブータン事務所の職員がスクリーンに映し出されたとき、生徒から「オー！」という歓声が上がった。事前の打ち合わせにはなかったが、二人はブータンの民族衣装を着ており、二人の前のテーブルには日本とブータン両国の国旗が飾られていた。生徒からはこれから外国と交流するという緊張感とワクワク感の高まりを感じることができた。

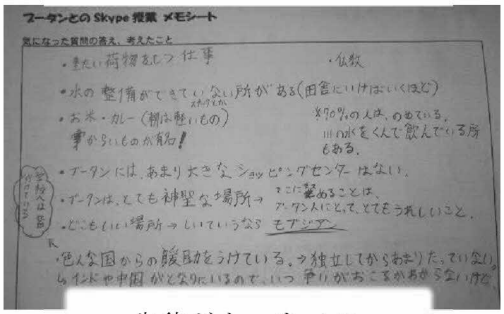

スクリーンに映った二人

初めに全員でブータンの公用語であるゾンカ語で挨拶（こんにちは―クズザンポー）を行った。

その後、生徒による英語での学校・地域の紹介を経て、ブータンについての質問を代表の生徒がパソコンの前で入れ替わりながら行った。質問内容が上手く伝わらないことも想定し、事前にブータン側に質問集を送付していたこともあり、スムーズにこちらの質問に対して答えていただくことができた。しかし、回答によっては聞き取りが難しく、青年海外協力隊員や英語科の教員に通訳してもらいようやく理解できるという場面が何度も見られた。


生徒が質問する様子

青年海外協力隊員への質問では、最初英語で質問して回答をいただいた後は、日本語でコミュニケーションをとる場面も見られた。


ブータンとのSkype授業 メモシート
気になった質問の答え、考えたこと
・仏教
・水の整備ができていない所がある(田舎にいけばいくほど)
・お米・カレー(朝は軽いもの)
・ブータンには、あまり大きなショッピングセンターはない。
・ブータンは、とても神聖な場所→
・どこもいい場所→いっていうなら モアシアン
生徒がとったメモ

発表していない生徒も、JICA ブータン事務所の職員や青年海外協力隊員の英語を聞き漏らすまいと真剣に聞きながらメモを取っている様子が見られた。

最後に、青年海外協力隊員とJICAブータン事務所の職員それぞれから中学生に向けてメッセージをいただいた。その後、生徒代表によるあいさつと生徒全員でゾンカ語の感謝の気持ち（ありがとう―カディンチェラ）を伝えた。

（６）生徒アンケートの分析

授業後に参加した生徒７７人アンケートをとった。社会科と英語科を一緒にやってみた感想は、楽しかった７４名・楽しくない２名・普通１名だった。また、授業でSkypeをした感想は、楽しかった７６名・楽しくない０名・普通１名だった。アンケートを見ると、多くの生徒が、外国人と交流したことやSkypeというICT機器を使ったこと、社会科と英語科がコラボレーションして授業を行ったことにワクワク感を感じていた。また、外国人と交流することを貴重な体験であると捉えている生徒が多かった。

これより、異文化理解に関する感想、英語科とコラボレーションに関する感想、そして、社

会科に関する感想、青年海外協力隊員との交流に関する感想をそれぞれ見ていくことにしたい。

（６）－１異文化理解に関する感想

・ブータン人は、時間をあまり気にしないということが一番びっくりした。
・Skype で話していたブータン人は時間を守っていたけれど、ほとんどのブータン人は時間を守っていないこと。
・ブータン人が日本と違って時間を守らないということがかなり自分にとって衝撃的だった。他にもそういう国が世界にはあるらしい。また調べてみようと思った。

ブータンでは時間を守らないという、日本とは異なる文化や生活を理解している様子が見て取れる。どの感想も時間を守らないことをネガティブな感覚でとらえているのではなく、その国では当たり前のことと尊重し受け入れていた。

（６）－２英語科とコラボレーションに関する感想

・私たちが文を考えてブータン人に伝わったと思うとすごく嬉しかった。
・自分の英語が通じてうれしかった。
・外国に全く興味がなかったけど、少し興味を持てた。
・社会のようなことを英語にするのは難しかったけど楽しかった。
・ブータンの国や暮らしを学ぶことができたし、英語で自分たちの質問を作れて通じていたのでうれしかった。

これらの感想のように、自身の英語が伝わり達成感を感じられた生徒が多かった。特に代表者として直接英語で質問した生徒は自身が発した英語が伝わるという大きな経験ができた。また、下線部の生徒のように代表者になっていない生徒も英文を訳する活動を行うことで、自分が訳した、または班で協力して訳した言葉が伝わる経験をすることができた。このように社会科の内容を英語で行ったからこそ、日本語では交流できない人と交流できているという充実感や自分たちが学んでいる英語が役に立っているという達成感、英語を話すことで新しい知識を得ることができ、世界が広がっていくという経験をすることができた。

（６）－３社会科に関する感想

以下の感想は、ブータンでは何が食べられているのか、主食は何だろうかという疑問を英語に訳した「What food do you usually eat?」「What is a famous food in Bhutan?」という質問に対する回答の感想である。

A コメとカレーを食べていると知ったときは予想と同じだったのでびっくりした。
B 私は中華料理を食べているのかなと思っていたので、コメやカレーを食べているというのが意外だなと思いました。でも、隣がインドなのでよく考えればそうかもしれないなと思いました。

A の生徒は、インドでカレーが食べられているというアジア州で学習した知識を使い、インドの隣にあるブータンでもカレーが食べられているのではないかという予想を立てた。その予想と JICA ブータン事務所の職員の回答が全く同じだったので、「(嬉しさから) びっくりした」という感想を持ったと考えられる。B の生徒は、ブータンの隣には、中国があることから、中華料理を食べているのではないかという予想を立てた。JICA ブータン事務所の職員の回答が予想と違いカレーという意見だったので、「意外だな」と思ったものの、インドも隣にあるという事実を冷静にとらえなおし、カレーを食べるという意見に納得している。A・B の生徒ともに以前に学習した内容から地理的な見方・考え方を駆使して予想を立て、インタビュー調査の結果、解決したり納得したりすることができた。

次の感想は SDGS の目標の一つである「安全な水とトイレを世界中に」をうけて作成した「Do you drink clean water?」という質問への JICA ブータン事務所の職員の回答に対する感想である。

- きれいな水を飲めない人もいるんだなあと思い、田舎の方が飲めないと聞いて日本と逆なんだなあとわかった。
- 田舎に行くときれいな水が飲めないのがびっくりした。田舎に行けば行くほどきれいな水が飲めなくなることが分かった。

二人の生徒は、この質問をする段階では、都会に比べて田舎の方がきれいな水を飲むことができるという社会認識を持っていた。これは、日本の都会の水道水に比べて田舎の水道水（井戸水も含む）の方がおいしいという経験を積み重ねてきたことで形成されたと考えられる。しかし、ブータンでは都会の方がきれいな水飲めるというブータン人の話を聞き、日本とは逆で田舎に行けば行くほど水がきれいではないという新たな社会認識を獲得することができた。

4. 成果と課題

（1）成果

ICT 機器と青年海外協力隊員の助けを得て、異文化・文明に属する人びとと接触する機会をもつことに成功した。生徒アンケートの分析にあったように、日本とは異なる文化を理解し、受け入れることができている生徒が多かった。「異なる文化・文明を理解、尊重し受け入れる寛容さ」を育んでいく実践としての一定の成果があったと言ってよい。写真や映像だけでは、異文化を“変わったもの”としかとらえられず摩擦を生む場合がある。しかし、異文化に直接触れ合うことで、異文化を理解できるし、尊重する気持ちも生まれる。この積み重ねが、グローバル化する国際社会に主体的に生きる生徒につながっていくと考える。

また、英語科とコラボレーションすることの意味においても、英文を作成しそれを外国人に伝え理解してもらうという活動を通して、生徒は達成感を感じることができた。英語科とコラボレーションすることで生徒にとっては意味のある活動になっていたということができる。英語科とコラボレーションしたことで、異文化交流における達成感という社会科のみの実践では

感じさせることが難しい体験をさせることができた。社会科単独で実践を行う以上にグローバル化を生き抜く力を育てるという目的に近づくことができたと考えている。

社会科での学びという視点では、事前学習と JICA ブータン事務所の職員との交流の中で社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせ課題を解決する思考過程が成立していた。この思考過程が成立した理由として、第１時に、過去に学んだ社会認識からブータンについて予想させる活動を行ったことが考えられる。予想をもとに考えた疑問（課題）を、インタビュー調査をすることで、自身の社会認識の再確認を行えた生徒もいれば、社会認識の更新を行った生徒もいた。予想することで地理的な見方・考え方を働かせる機会を作り出すことができた。

（２）課題

授業を通して感じた課題は、ブータン側からの音声の聞き取りにくさが挙げられる。この課題については、①音声を再生する機材の問題、②生徒のリスニングの力の問題、③交流する対象の英語の訛りの問題が考えられる。

①について、今回はプロジェクター本体から音声を出し、音声が不鮮明になる場面があった。次回は、音声専用のスピーカーを使用するなど円滑にコミュニケーションできるハード面の整備を行うことで改善することが期待できる。②については、パソコンから伝わる英語を聞き漏らすまいと多くの生徒が集中して授業を受けていた反面、英語が苦手な生徒は通訳した部分しか聞きとることができなかった。今後も英語科とコラボレーションで行う場合、リスニングのレベルを高めておく必要がある。その意味では、リスニングの能力が向上しているという点で 3 年生で本実践を行う方が英語をスムーズに聞き取ることができると考える。③では、交流する対象国特有の訛りがあることで聞き取りにくい場合がある。これについては、事前に訛りについて生徒に話しておくことで解消できる可能性がある。

5. おわりに

都会から遠い地域の生徒を「グローバル化する国際社会に主体的に生きる」生徒に育てる目的で本実践を行った。今回、社会科と英語科のコラボレーションという形で行い、生徒・教員共に毎回の授業をワクワクしながら一緒に授業を作ってきた感覚がある。ICT 機器を使い、遠く離れて直接会うことができない外国に住んでいる人とリアルタイムで交流することや他教科と一緒に授業を作っていくことに生徒も教師も授業にのめり込んでいった。生徒は毎回の授業にワクワク感を持って取り組み、放課後残って質問の計画を立てることも嫌がることなく楽しそうに取り組んでいた。外国や教科とコラボレーションすることの可能性を感じることができた。

普段の授業で外国と交流する場面は頻繁に作れるものではない。しかし、筆者は生徒のあの目の輝きを知ってしまった。難しいかもしれないができる限りこのような機会をつくり、「グローバル化する国際社会に主体的に生きる」生徒を育てていきたい。そして、毎回の授業でも生徒がワクワクできるような授業を計画し、生徒とともに授業を作っていきたい。

引用・参考文献

・文部科学省（2017）『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説社会編』

・文部科学省（2009）「国際教育交流政策懇談会（第 1 回）配付資料」（グローバル化と教育に関して議論していただきたい論点例）

・平山 修一（2019）『現代ブータンを知るための 60 章』明石書店，第 2 版

・日本 CLIL 教育学会ホームページ，https://www.j-clil.com/clil，（2019 年 11 月 20 日最終閲覧）